



# 学校だより 9月号

令和2年8月31日発行

ふるさとに学び ふるさとで遊び ふるさとを愛する子 ～ふれあいがやき豊かな心～

## しなやかに 柔軟に

校長 高橋 美都子

「早生まれに送るエール」という記事が少し前の新聞に載っていました（朝日新聞 令和2年6月22日付）。生物学者の佐藤克文さんの書かれたものです。早生まれの中でも最も早生まれの私としては、思わず手に取って読まずにはいられませんでした。

野球やサッカーのプロ選手には早生まれが少ないというデータがあるそうです。それは日本だけでなく、欧州のプロチームにもいえることで「プロ選手として身を立てるための要素には、遺伝や努力だけでなく、偶然の環境もあるということ。偶然に左右されるという点では『人間も動物なのだ』と生物学者として興味深かった。」という文章で始まっています。幼少の頃から勝ちにこだわるチーム編成や采配をされていく中で、体力の面で活躍しにくく、結果そのスポーツから離れてしまうということになりやすいと分析されている文章が続きます。しかし、「例えばサクラマスはここから新しい物語が始まる」と続きます。川で孵化した稚魚は環境が良く餌をたくさん食べられる個体がますます大きくなり、そのまま川で成長をしてヤマメと呼ばれるようになります。では小さい個体はというと、川での成長をあきらめ、新たな環境である海へ下るそうです。「食べられてしまうリスクは高まるが、エサは豊富。生き残ったサクラマスは体長50センチ以上に成長して産卵期にまた、川へ帰ってくるのです。そうなるとヤマメは太刀打ちできません。」さらにサッカー日本代表の早生まれが多くなる年の環境についての分析を行い、「自分の不利と向き合うことは優位性につながり得る」と書かれています。「早生

まれは、早い段階からおのずと考えざるを得ない状況に置かれており、自ら考え、困難を克服する準備ができています。これはどの分野でも同じです」「どんな状況にも通じるという方法はなく、刻々と変化する環境に適した方法をとっていく個体が最後には一番強い」と締めくくられています。

これまでの学校生活が一変し、もう半年以上たちます。これまでと同様に安全・健康を考えながらも、教育活動の場面では、環境に適した方法を取りながら、しなやかに柔軟に対応していくことを考えています。例えば、授業ではグループでの話し合いを行わず、ノートを回し読み、自分の感想や考えを付箋に書いて貼ることで伝えていたり、皆が集まって見ていた図工の用具の使い方はOHCでテレビに映して各自の座席から見るようにしたりしています。子どもたちが楽しみにしていた宿泊体験学習は実施ができないと判断しましたが、感染症対策を行っての日帰り体験学習を行い、そこで得られることを十分に精査した上で活動を決定していこうと検討しています。制約だけでなくそこからできる「新たな工夫」がこれからは大切になってくることを強く感じています。少しずつでも確実に、本校の新しい教育活動を進めていきます。

朝夕は虫の声が響くようになりました。とはいえ、日中の暑さは尋常ではありません。WBGT指数（暑さ指数）計とにらめっこをしながら、運動場や体育館での運動が、休み時間の外遊びが、できるかどうかを確認している毎日が続いています。皆さまもどうぞご自愛ください。